

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 20 日現在

機関番号：13101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884026

研究課題名(和文)日本初期写真における写真受容の様相 - - 新潟県南魚沼市六日町の今成家の事例を通じて

研究課題名(英文) The Acceptance of Photography in Japan During the Early Meiji Era: with a Focus on the Imanari Family Photography Collection in Muika-machi, Minamiuonuma City, Niigata Prefecture

研究代表者

榎本 千賀子 (ENOMOTO, Chikako)

新潟大学・人文社会・教育科学系・助教

研究者番号：80710384

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：新潟県南魚沼市六日町の今成家の写真実践の事例分析を中心としながら、日本における明治初頭の写真受容を、歌舞伎や浮世絵、黄表紙などの庶民文化との関連性と、写真以外への領域への社会・文化的影響に注目しつつ分析した。

今成家の事例から、先行する西洋由来の視覚装置への受容を引き継いで生まれた「心を写す写真」や、「声・動きを写す写真」という写真をめぐる定型的イメージを発見し、それらが明治初頭の日本における遊戯的な文化領域に広く共有されていたことを示した。また、「心を写す写真」が文学の近代化に与えた影響と、「声・動きを写す写真」が蓄音機や活動写真などの後続メディアの受容に与えた影響を指摘した。

研究成果の概要(英文)：With a focus on the Imanari family photography collection, this research project examines the acceptance of photography in Japan during the early Meiji era. I examine the socio-cultural impact of photography and the relationship between photographic practices and the preceding visual culture; Kabuki, Ukiyo-e (Japanese woodblock prints), Kibyoshi (Japanese picture books) et al..

To clarify the acceptance of photography, I examine popular cliches related to photography; “photography of mind”, “photography of voice”, “photography of action”. “Photography of mind” is under the influence of the acceptance of western optical apparatuses such as magic lanterns in the Edo period. At the same time, this cliché functions as a symbol of the innovations of the contemporary literature. “Photography of voice” and “photography of action” have an influence on the acceptance of other new audio-visual media; Chikuon-ki (phonograph), Katsudo-shashin (moving picture).

研究分野：写真史

キーワード：写真 浮世絵 歌舞伎 黄表紙 写し絵 蓄音機 活動写真 文学

1. 研究開始当初の背景

西洋で生み出された新しいメディアである写真は、独自の視覚文化を発展させていた日本ではいかに受容されたのだろうか。日本初期写真をめぐるこの問いは、近現代の視覚文化、ひいては日本の近代化を捉える上で重要な意味を有している。

写真史研究は、長らく美術史や西洋の写真史をモデルとした研究枠組みのなかで進められてきた。しかしながら、初期写真研究は、近代的な意味での「美術」成立以前において、必ずしも後年の「美術」に整合的であるとは限らない、多様な試行錯誤によって「写真」そのものが問われてゆく、写真の導入～普及期を対象としている。

このような対象と研究枠組みの齟齬のなかで、これまでの初期写真研究は、西洋とは異なる文化背景のもと、「美術」の領域をはるかに超えた多様な試行錯誤によって、写真という新メディアが社会に根付いてゆく様相を、十全には捉えきれてこなかった。この問題の原因は、以下の2点に多くを負っている。

- 先行する写真史で検討されてきた事例が、先駆的な写真師たちの事例や後年の表現史としての写真史に整合的に連なる事例に限られていたこと。例えば、地方における事例や、先駆的事例に続く無名の庶民層を担い手とした写真普及期の事象は、先行する写真史では詳細には検討されてこなかった。
- 先行する視覚文化と、写真術の導入の連続性と断絶が、具体的な事例に基づいて詳細に議論されてこなかったこと。明治期における写真の速やかな普及が、浮世絵などの木版複製技術に支えられた江戸期の庶民的視覚文化の隆盛を背景としていたことは、これまでの写真史でも指摘されてきた。しかし、これを具体的な作品レベルで検討する研究は乏しかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、新潟県南魚沼市六日町の今成家に残された湿板写真(今成家写真)の事例分析を出発点としつつ、この事例をより一般的な初期写真全体の状況に社会的・歴史的に位置づけて検討し、明治初頭を中心とした日本における写真の受容を捉えなおすことにある。

江戸期の六日町は、三国街道の宿場町として、また魚野川の船着場として、江戸と新潟を結ぶ、人・物・情報が行き交う交通の要所であった。今成家は、この地において裕福な地主であり、苗字帯刀を許された村役人として、共同体の指導者的立場にあった。また、今成家写真とは、この今成家の19代目当主であった今成無事平が、江戸の写真師であった大鐘立敬に写真を学び、江戸末期から明治

初頭にかけて、弟の新吾ら近親者とともに六日町で撮影したと伝えられる52枚の湿板写真群である。

今成家写真を中心的な分析対象としたのは、これまでほとんど知られてこなかった地方の在村指導者層における写真実践を採り上げ、写真史をより多様な事例から捉え直すにあたり、まとまった分量の写真が技法書等の関連文書とともに残され、比較的当時の文脈がよく保存されていると思われるこの事例が、理想的であると考えられたためである。

また、本研究以前に報告者が行っていた研究から、今成家写真が、南魚沼地方で盛んであった地芝居に加えて、浮世絵、黄表紙などのより広範な地域に共有されていた庶民文化の影響下に生み出されていたことが明らかとなっていた[榎本2013]。このことから、今成家の事例のさらなる分析が、先行する庶民文化の写真受容への影響を、具体的事例に基づいて検討してゆく上で有益であると予想されていた。

3. 研究の方法

本研究においては、今成家の事例と、より一般的な写真受容の両者を関連付けて分析するために、以下に挙げる3つのアプローチを適宜組み合わせ用いた。

- 今成家写真、および今成家文書の分析によって、今成家における写真実践・受容を検討すること。
- 小新聞や小説などの言説の分析によって、明治中期までの一般的な写真実践・受容を検討すること。
- 具体的な作例を通して、写真と先行文化、同時代文化の関係性について検討すること。

また、より具体的な研究トピックスとして、以下の3点をとりあげて論じた。

- 本研究以前の研究で指摘することができた、「心を写す写真」などの今成家写真に見られるイメージの一般性を明らかにすること。
- 今成家写真から重要性が示唆される、地芝居や歌舞伎などの芸能と明治初頭の写真の関係性を、具体的な作例の検討を通じて明らかにすること。
- 写真をめぐる定型的イメージが、同時代の文化や後年の動向に、いかに影響したかを広く検討すること。

4. 研究成果

本研究によって、以下の知見を得ることができた。

- (1) 今成家における写真の実践・受容とその一般性について
今成家の写真実践が、六日町の地域文化と

ともに、広く全国的に共有されていた先行庶民文化、および同時代文化から縦横に影響を受けていたことを、以下の2つのトピックスを中心とする分析を通じて、明らかにできた。また、今成家の事例が決して特殊なものではなく、今成家の写真受容と同様の認識に基づいた事例が、同時期に多く指摘できることがわかった。

「心を写す写真」のイメージ

本研究以前より報告者は、今成家に残された写真1のなかに発見した「心を写す写真」というイメージが、明治初頭の日本に広く共有されていた定型的イメージである可能性を指摘してきた〔榎本 2013〕

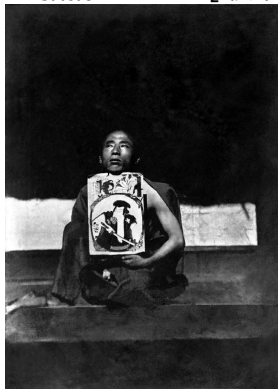


写真 1

山東京伝『人心鏡写絵』(1796年)は、写真以前に西洋より伝えられた視覚装置である「写し絵」と、江戸後期の庶民道徳である「心学」の2つを趣向として、「心」を写し出す西洋視覚装置のイメージを描き出した黄表紙作品である。今成家の写真1は、こうした先行する江戸期のイメージを踏襲し、「心を写す写真」として、新たな光学技術である写真にその着想を適用・変奏したものである。

以上の先行研究を発展させ、本研究では、こうした「心を写す写真」のイメージが、今成家のみならず、明治中期までの日本の遊戯的な言語活動のなかに、多く指摘できることを明らかにしていった。

例えば今成家には、写真にまつわる都々逸が残されている。そして、その中の一節には「思ひやつれしかほうつすより うつしてみせたへ胸のうち」(今成家文書、日付等不明)とあるが、これとほぼ同じ着想は、北信自由党员による制作者、年代不明の戯れ歌「顔や姿は寫眞にとれど とれぬ二人の胸のうち」〔足立 1932:42〕にも見られる。以上の例は、当時こうした写真と「心」を結びつけた言葉遊びが口伝えに流行していたことを示している。

また、「心を写す写真」であるという設定のもとに記述された滑稽味のある道徳的説教が、新聞投書欄に2回に分けて掲載されている(「心の写真」『読売新聞』1876年3月29日、4月15日)。しかも、この投

書は、高慢な投書者の腹中を写した「写真」だとして書かれた関連投書が、他紙である『東京絵入新聞』(1876年8月1日)に掲載されるなど、当時大きな反響を呼んだようである。これらのことから、「心の写真」というアイデアが、口承のみならず活字メディアを通じても流通していたことがわかる。

「写し絵」が心の中を写し出すという江戸期に生まれたイメージが、「幻燈」という新たな技術と結びつきながら、明治期にも盛んに浮世絵等に描かれていたことは、これまでも映画を中心とした映像史研究の領域で指摘されてきた〔岩本 2002:137-138〕

しかし、こうした先行研究に対して、本研究が明らかにしたのは、この「写し絵」に由来するイメージが、さらに別種の映像技術である「写真」と結びつき、「写し絵」や「幻燈」と関連しつつ、独自の展開を見せていたということである。この発見は、映画史を拡張する形で進められてきた多様なスクリーン・プラクティスに対する考察と、個別メディア史研究である写真史を、今後関連づけながら発展させてゆく手がかりになるものと考えられる。

芸能と写真の関係性

まず、写真2について、この写真が人物たちのポーズや衣装や小物などの使われ方から、芝居「白石噺」の敵討場面を再構成したものであると明らかにした。その上で、こうした写真が、六日町で盛んに行われていた地芝居の影響とともに、歌舞伎や浮世絵、さらには明治初頭には広い地域と階層に向けて販売されていた演劇写真という、歌舞伎を中心とした庶民文化の広い領域に影響を受けて撮影されていた可能性を、当時の社会状況の分析によって、明らかにしていった。



写真 2

その後さらに、この写真と、写真の構図やポーズの決定に参照されたと考えられる「白石噺」の同一場面を描いた浮世絵のうち、歌川国芳による一枚をとりあげて比較し、写真と先行する視覚文化との表象システムの相違点、および写真によってもたらされた新たな像に対する当時の人々の反応を検討した。その結果、以下の知見が得られた。

浮世絵は、定型的な瞬間表現を用いなが

ら、ナラティブと意味的まとまりを持つ芝居の一場面を再構成してゆく。これに対して写真は、浮世絵の描写を、生身の人間のパフォーマンスと構図・ポーズ等の選択によって模倣しようとする。しかしながら、写真は、身体の不随意なゆらぎをふくむ「見得」の具体的数秒間を、光学的・化学的性質によって静止像へと変換する技術である。この表象システムの違いによって、写真と浮世絵が生み出す像には相違点が生まれる。

当時の人々は、先行する浮世絵とは大きく異なる特徴をそなえた写真術による像を、しばしば違和感のある像として否定的にとらえていた。しかし、明治の写真店顧客向け解説書である松崎晋二『写客の心得』(1886年)が示すように、写真と浮世絵の差異のうち、当時の人々に意識的に違和感を引き起こすものとして捉えられていたのは、トーンや人体のプロポーションの問題などに限定されていた。

写真の普及期には、写真のもたらす新しい像が抵抗感をもって受け止められ、写真に写ると寿命が縮む、生気を吸い取られるという迷信さえも多く生まれていたことが、これまでも広く知られてきた。

しかしながら、実際に写真がどのように先行する視覚文化と異なり、写真の新しさが人々にどのように理解されてきたのかは、具体的な作例に基づいて検討されることがほとんどなかった。これに対して、本研究で行った「白石断」の同一場面を扱った写真と浮世絵の比較は、写真受容の問題を、具体的な作例のレベルで検討したことに意義がある。また、庶民レベルにおける写真受容を考察してゆくにあたって、歌舞伎を中心とした芸能の問題が極めて重要であることを、具体的事例に基づいて示した点も、今後の写真研究にとって、大きな貢献であるといえる。

(2) 写真をめぐる定型的イメージが示す写真受容とその影響

今成家写真の事例分析に引き続いて、事例から発見できた写真をめぐる定型的イメージを、より一般的な状況において分析・考察した。その結果、これらの写真をめぐる定型的イメージと結びついた明治期の写真受容の様相、および写真の文化的・社会的なインパクトについて以下の知見を得られた。

『写客の心得』などから分かる通り、写真の普及期において、写真の新しさは当時の人々には、ごくごく限られた形でしか自覚的には捉えられてこなかった。しかし、写真がもたらした新しい像は、「寿命が縮む」「生気を吸い取る」などの迷信を抱かれて恐れられる一方で、遺影や御真影などの用法にみられるように、早い段階から被写体の存在全体を代理する可能性を持つものとして期待されてきた。

今成家の写真から見えてきた「心を写す写真」のイメージは、こうした写真への恐れと期待に、江戸期の西洋視覚装置の受容とその庶民文化への影響を参照しつつ形を与えたものと捉えられる。しかし、このイメージは、当時の人々が写真に「心」が写ると信じていたことを示すのではない。むしろ、このイメージは、写真の迫真性を感知したときに、人々に掻き立てられてしまう対象の全体性の再現への欲望が、遊戯的な領域において自省的に受け止められ、新たな創作の源泉となっていたことを示しているのである。

また、こうした対象の全体性への欲望は、松村春輔の小説『春雨文庫』(1875年)中に登場する都々逸「もの言ふ寫眞が出来たらまたも動けば宜にと思ふだろ」のように、「声」や「動き」と写真を結びつけてゆく定型的イメージをも生んでいる。

そして、こうした写真をめぐる定型的イメージや表現は、以下に示す通り、写真の領域にとどまらない影響力を持っていた。

戯作を脱却し、近代的小説の樹立を目指していた坪内逍遙は、小説論『小説神髓』(1885-1886年)やその実践を目指した小説『当世書生気質』(1885-1886年)の前書きにおいて、新たな心情・世態描写を指し示す言葉として「写真」を用いている。また、『当世書生気質』初版本の表紙デザインは、京伝の心学もの黄表紙『心学早染草』(1790年)に登場した、裸体の上に漢字一字を書いた卵のような丸い頭部を乗せた「悪玉」キャラクターを引用したものであった。

また、宇田川文海は、この逍遙の試みを参照し、キリスト教と空想社会主義を背景に持つ小説 Sue, Eugene. *Les Sept Péchés Capitaux*, 1847-1852 (『七つの大罪』)中の「Avarice (強欲)」と題された章を、京伝の『人心鏡写絵』をもじって『人心写真絵』と題し、吝嗇を諷める心学もの小説として翻案。その上で、紙焼き写真を模した挿絵を付して新聞に連載した(『朝日新聞』(1886年12月10日~1887年3月2日))。

戯作と新たな視覚技術を結びつけて生まれた「心を写す写真」は、戯作を参照して生まれたものでありながら、写真、テキスト、挿絵、など多様なメディアを組み合わせて試みられていた文学の革新のなかで、戯作から近代的小説への転換を象徴するイメージとなっていたのである。しかも、そのイメージは、西洋社会の宗教や社会思想を翻訳する際にも、鍵となるイメージとしても用いられていたのである。

これに対して、「声」「動き」と写真を結びつける定型的イメージは、「心を写す写真」のような明確な先行イメージをもたず、一見すると絵画を含む迫真的表現一般に対する他の常套的賞賛と区別がつかない。しかし、これらのイメージは、蓄音機や活動写真などの後続メディアの受容に際して、人々が写真との類推によってその後続メディアを理

解してゆく背景となっていた。

こうした写真をめぐる定型的イメージについて、本研究で得られた知見は、写真史のみならず、同時代の文学や、これまでに指摘されてきた幻燈などの他の同時代の視覚メディアに関する定型的イメージを考察するにあたって、今後応用することが可能である。

本研究で得られた知見と、本研究で採用した、これまでの写真史では検討されてこなかった個別具体的な事例と幅広い文化現象の相互作用に注目する研究手法は、本研究が対象とした明治初頭以降を考察するにあたって有効であると考えられる。

写真を含む映像は、いまや誰もが使える技術となり、映像は重要な現実構成要素のひとつとして、日常のあらゆる場面に入り込んでいる。しかも現在、デジタル技術やモバイル技術の発達によって、映像の枠組みは大きく変化しつつある。このような状況を考察する上で、写真受容の歴史的考察は、欠かすことのできない基礎研究のひとつである。本研究を今後も継続し、これまでに得られた知見を活用しつつ、後代の幅広い写真・映像受容や実践を考慮に入れた包括的な映像受容史へと発展させてゆくことが、今日的な問題を考察するためにも、必要なことなのである。

なお、本研究では、論文等を通じた通常の研究結果の公表に加えて、今成家写真が生まれた土地である、新潟県南魚沼市において展覧会「今成家写真と南魚沼の文化」展（写真3）と関連講演会を開催し、市民にむけて研究成果を公表した。展覧会は約 2000 人の来場者があり、講演会には 56 名の市民が参加した。



写真 3

【参考文献】

- 足立幸太郎『北信自由黨史』1932年
- 岩本憲児『幻燈の世紀：映画前夜の視覚文化史』森話社、2002年
- 榎本千賀子「合わせ鏡の写真論-新潟県南魚沼市六日町今成家の写真に見る写真経験への江戸文化の影響」『言語社会』一橋大学言語社会研究科、第7号、pp.193-208、2013年

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

榎本千賀子「『芝居』を写す写真：今成家湿板写真コレクションにおける明治初頭の演劇写真と『歌舞伎文化圏』」『映像学』日本映像学会、第93号、pp.5-22、2014年、査読有り

榎本千賀子「今成家写真から見える南魚沼の文化と日本初期写真史」『新潟地域映像アーカイブ』新潟大学人文学部、第5号、pp.2-7、2014年、査読無し

<http://hdl.handle.net/10191/30048>

榎本千賀子「『心』を写す写真：明治初頭の写真受容と『心』の道德哲学」『表象文化論学会ニュースレター REPRE』表象文化論学会、vol.19、2013年、査読無し

<http://repre.org/repre/vo19/note/01/>

〔学会発表〕（計3件）

榎本千賀子「写真に写る『心』と『声』：明治初頭の写真受容」『社会情報学会』第3回東北支部研究発表会、2015年3月14日、新潟大学南キャンパスときめいと（新潟・新潟市）

榎本千賀子「新潟県南魚沼市六日町の今成家コレクションに見る明治初頭の写真受容：演劇的写真の成立基盤と『時間』表象に注目して」『日本映像学会』第40回全国大会、2014年6月8日、沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス（沖縄・那覇市）

榎本千賀子「六日町の明治アマチュア写真：今成家写真の想像力と通俗道德・都市文化」『映像、アマチュア、アーカイブ』大学・地域・連携シンポジウム、2014年3月1日、神戸大学瀧川記念会館大会議室（兵庫・神戸市）

〔その他〕

展覧会

榎本千賀子「今成家写真と南魚沼の文化」展、2014年10月19日-11月21日、南魚沼市図書館展示コーナー（新潟県・南魚沼市）

講演会

榎本千賀子「今成家写真から見る日本初期写真史」『今成家写真と南魚沼の文化展講演会』2014年10月19日、南魚沼市図書館多目的ホール（新潟県・南魚沼市）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榎本 千賀子 (ENOMOTO CHIKAKO)

新潟大学/ 人文社会・教育化学系/ 助教

研究者番号：80710384